

草の芽句会だより 厚

NO,106
29,6, 1

短夜の夢とりどりや忘れいし
山雀を肩に遊ばせ茶屋主 貞

夏木立石のベンチに語りをり
野グルミの花を散らせる城小径 純子

木の机石の机や若葉風
若葉風ふらりふらりと城歩く 貞子

夏落葉城の小径を埋めにけり
睡蓮の池を従え御殿門 禮子

井戸端に柿の花散る日暮かな
片陰に浴ふて城山上りけり 剋子

城下町初夏の小さなコンサート
城若葉音楽祭の銀のくつ 範子

ぞらまめ
蚕豆の蚕のごとき形して
筍の土もこもことうねうねと 文子

どくだみの花の白さよ暮れなずむ
梅雨晴れの讃岐の山のやさしさよ 芳子

少し青き初生りの枇杷仏前に
あじさいの雨に送りし女かなし 節子

出席者 真鍋 森 馬場 川原 小山
投句者 大黒 吉崎 氏家 小林

今日から六月。城山はこんもりと柔らかい緑に覆われ、頂上には白い天主閣が端座している。見返り坂を上ると楠の古木がベンチを覆って大きな蔭を作っていた。暇そうなおじさんが三人、顔を寄せベンチで楽しそうに話をしている。「男性もお喋りは楽しいと見えるで」「昔はここに延寿閣があったなあ」「送別会や歓迎会の度の上ってきたなあ」 若葉の風に吹かれながら、しばし遠き想い出に心を遊ばせる。栃の木御門へ向う石畳には夏落葉が散り敷いていた。梢に小鳥の声が絶え間ない。 来月は梅雨最中、体調に気をつけて楽しく作句に励みたい。

